資料３

第21回 昭和館見学作文コンクール 審査結果

No	氏名	学校名・学年	賞
1	上野　遙	女子学院中学校 3年生	厚生労働大臣賞
2	小林　蒼衣	鎌ケ谷市立五本松小学校 6年生	昭和館館長賞
3	藤井　初華	江戸川区立下鎌田小学校 6年生	優秀賞
4	八幡　茉璃南	鎌ケ谷市立五本松小学校 6年生	優秀賞
5	小林　知寛	習志野市立屋敷小学校 6年生	優秀賞
6	井上　明香里	鎌ケ谷市立五本松小学校 6年生	優秀賞
7	堤　夏歩子	世田谷区立烏山小学校 4年生	優秀賞
8	望月　悠花	港区立御田小学校 6年生	優秀賞
9	市村　詩織	江戸川区立下鎌田小学校 6年生	優秀賞
10	西府　真央	鎌ケ谷市立五本松小学校 6年生	優秀賞
11	髙橋　愛佳	江戸川区立下鎌田小学校 6年生	審査員特別賞
12	大橋　遼己	鎌ケ谷市立五本松小学校 6年生	審査員特別賞
13	前島　滉	江戸川区立下鎌田小学校 6年生	佳作
14	小出　さくら	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
15	川上　航太朗	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
16	鹿島　あかり	江戸川区立下鎌田小学校6年	佳作
17	渡邊　彩日	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
18	小川　夏芽	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
19	佐藤　瑛南	江戸川区立下鎌田小学校6年	佳作
20	滝井　敦也	清瀬市立清瀬第十小学校6年	佳作
21	竹内　実南	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
22	油座　遥香	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
23	渡邊　玲亜	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
24	中村　美優	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
25	菅野　はな	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
26	斉藤　あかり	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
27	立石　彩育	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
28	樋口　明日加	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
29	橋都　彰	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
30	菅野　旭希	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
31	山本　汐	鎌ケ谷市立五本松小学校6年	佳作
32	原　さゆり	江戸川区立下鎌田小学校6年	佳作
33	伴 心咲	江戸川区立下鎌田小学校6年	佳作
34	松浦　初音	江戸川区立下鎌田小学校6年	佳作
35	廣瀬　湊愛	フェリス女学院中学校2年	佳作

36	熊本　恵大	こざくら幼稚園年長組	昭和館特別賞

厚生労働大臣賞

戦争の記憶を未来へ

上野　遥

令和四年七月三日に昭和館「次世代の語り部」である上野順一さんの講話を聴いた。「僕の家にも戦争があったよ」という題で、順一さんが父親の基さんから聞いた戦争体験についてお話してくださった。その内容を大まかに振り返ってみたい。

昭和一〇年、上野基は横浜に下駄屋の長男として生まれた。六人兄弟で唯一の男子だったためか、少し気弱な面もあった。父親の福次郎は無口で怖かったが、下駄職人としての腕は良く、八人家族は普通の暮らしを送っていた。しかし戦争が始まり、生活は一変する。

昭和一九年、基は小学三年の時に学童疎開を余儀なくされた。箱根湯本の恵比寿旅館で生活するようになるが、栄養失調になってしまい、短期間で帰宅した。学校に戻ろうとするが、そこは戦争により病院となっていたため隣町の学校に復学した。

20×20

一九四五年五月二九日、基が一〇才の時に横浜大空襲が起きる。いつもと変わらない昼間、横浜市を中心とした地域がアメリカ軍の無差別爆撃の焼夷弾によって、火の海に一変した。死者は三六四九人、負傷者は一一九七人であったという。煙の中を必死に逃げ、なんとか家族全員無事だったが、変貌した街を見て悲しさが込み上げてきた。

戦争が終結しても、その傷跡は残り続けた。食糧が十分になく満足に食事ができなかったり、アメリカ兵が家の周りで騒いでいることに恐怖を感じたりした。不安な出来事は後を絶たず、戦前のような安心した日々を送ることは難しかった。それでも人々は復興に向けて前向きに歩み出し、一九五〇年には基も日本通運に就職して働き始めたのだった。

以上が伺った戦争体験の内容だが、考えさせられることが多々あった。特に戦時下の生活の悲惨さから、当たり前の日常を送ることができる幸福を改めて実感させられた。講話

会の最後に、順一さんが現在の基さんの言葉を引用した。「戦争体験は、忘れたくもないが思い出したくもない記憶。毎日が平凡であることはとても有難いのだから、感謝しなければならない。戦争について考えることは平和について考えることだ。」と。この言葉には、基さんの苦々しい戦争の記憶と平和への願いが強く込められていると感じた。戦争は心身共に人々を傷つけ、そこから得られるものは何もない。しかし現在でもウクライナとロシアの間では戦争が行われ、多くの犠牲者が出ている。戦後七七年が経過した今もなお、私たちは戦争の惨禍を目の当たりにしているのだ。これからの未来を担っていく私たちにできるのは、基さんもおっしゃっていたように、残酷な過去から教訓を学び、歴史を受け継いでいくことだろう。今後も戦争を起こさないための知識を磨き、希望の持てる平和な世界をどうしたら築いていけるのかを、自分なりに絶えず考えていきたいと思う。

昭和館館長賞

No. 1

空ばくのおそろしさを知って

小林　蒼衣

私は半藤一利さんのオーラルヒストリーの動画を見て、日本が戦争をしていたころ、日本に空ばくがあり、そのころを生きていた人達はこんなに大変な毎日をすごしていたということを初めて知りました。今の東京はたくさんのビルが建っていて、とてもきれいで都会だなと思っていたけれど、七十八年前は、たくさんの家が焼かれ、たくさんの人が亡くなっていたことにおどろきました。しかも私は、空ばくの経験が無いので、毎日空ばくを受け、つらい生活が当たり前のようにすごしていた半藤さんは毎日、命がけで、大変だったんだと思いました。もし、私がその場にいたらきょうふのあまり固まって動けなかったんじゃないかと思います。その中でも半藤さんは私と同じくらいの年でありながら、冷静に判断してにげているのがすごいと思いました。半藤さんの一つ一つの行動で生きるか、

No.

死ぬかが、決まるんだなと思いました。

半藤さんの話でとても印象に残ったことは見ず知らずの人が半藤さんにくつをわたしてくれたという話です。空はくが終わり、家に帰る時、くつが無く、地面が熱くて困っていると、近くの人が落ちていた誰かのくつをわたしてくれました。私はそのやさしさに感動しました。自分がくつを持っていても、子どもが困っていることに気づけないと思うし、もし気づいていてもあんな状きょうの中であげることは出来なかったのではないかなと思います。あんな大変な目に合っても人を思う気持ちを私も大切にしたいと思いました。

もう一つ印象に残った言葉は、「俺はこれから絶対という言葉を使わない」と、半藤さんが言っていたことです。「絶対日本は勝つ」などの言葉は、全部うそだと語っているのを見て、私も絶対ってことは無いんだなと思いました。予想もしていなかったことが起きて、とても悲しかったんだと思います。

このインタビューを見て、私は戦争をしてはいけないと思いました。戦争をするとたくさんの人が焼け死んでしまったり、おぼれ死んでしまいます。そういう姿を見たくないので戦争はしてはいけません。今、世界でも戦争が起こっています。戦争はその国だけの問題ではなく、日本にもたくさんのえいきょうが出ています。日本も北朝鮮やかん国、中国、ロシアとの領土の問題で、解決できていないことがあります。その一つ一つの問題を少しずつ解決していかないと、戦争が起こってしまいます。見て見ぬふりをしないで一つずつ向き合って解決していかなければいけないと思います。